

令和4年度 田園自然再生活動の集い

「棚田の魅力」再発見ー持続可能な田園自然再生活動のヒントを探してー

開催報告

令和4年12月7日、東京大学弥生講堂一条ホールで『「棚田の魅力」再発見ー持続可能な田園自然再生活動のヒントを探してー』をテーマに、「田園自然再生活動の集い」を3年ぶりに対面で（WEBとのハイブリッド方式）開催しました。

WEB視聴も含め、田園自然再生活動に携わる活動団体や行政職員、農業関係者、大学関係者など150名を超える参加者が熱心に耳を傾けました。

1. 開催目的

農村では、農業の営みを通じて田んぼや水路、ため池などにさまざまな生きものが育まれ、自然豊かな環境が作り上げられてきました。そして、こうした農業・農村のもつ豊かな自然環境の保全・再生を図るため、地域が一体となって取り組んでいるのが「田園自然再生活動」です。

農家の高齢化や減少に伴い、こうした活動や活動団体の脆弱化が懸念される中、「田園自然再生活動」によって育まれてきた自然、文化、そして地域社会がより良いものになるよう、改めてこれら活動団体の体制を確立し、着実に活動していく必要があります。

このため、「田園自然再生活動協議会」の会員をはじめ、農業者、行政機関、環境保全活動NPO、多面的機能活動組織、学校関係者の参加のもと、相互に情報交換や意識啓発を図り、田園自然再生活動の継続・充実や拡大を図ることを目的に、「田園自然再生活動の集い」を開催するものです。

今回は、『「棚田の魅力」再発見ー持続可能な田園自然再生活動のヒントを探してー』をテーマとして、人口減少社会の到来を迎え、多様化が進む棚田地域の取組に注目し、田園自然再生活動を持続的に展開するヒントを探ります。

2. 開催概要

- ・開催日： 令和4年12月7日（水） 13:00～16:30
- ・開催場所： 東京大学弥生講堂一条ホール ※WEB配信併用
- ・主催： （一社）地域環境資源センター、田園自然再生活動協議会
- ・後援： 農林水産省、環境省、
全国農村振興技術連盟、（公社）農業農村工学会、
農村計画学会、棚田学会、（一財）日本グラウンドワーク協会

・参加人数： 156名

・プログラム：

- (1)主催者挨拶 田園自然再生活動協議会 会長 中村桂子
- (2)来賓挨拶 農林水産省農村振興局整備部長 青山健治
環境省自然環境局自然環境計画課長 堀上勝
- (3)基調講演 坂田寧代（新潟大学農学部 准教授）
「山古志のむらづくりにみる持続可能な田園自然再生活動に関する示唆」

(4)パネルディスカッション

- ・コーディネーター： 荘林幹太郎（学習院女子大学 副学長）
- ・コメンテーター： 中村桂子（田園自然再生活動協議会 会長）



銀杏が美しい
東大弥生講堂一条ホール

- ・パネリスト：
- 坂田寧代 (新潟大学 准教授)
 - 林田直樹 (地域環境資源センター 理事長)
 - 田口 譲 (岐阜、NPO 法人恵那市坂折棚田保存会)
 - 水柿大地 (岡山、NPO 法人英田上山棚田団)
 - 新井沙織 (新潟、NPO 法人越後妻有里山協働機構)
 - 石塚 康太 (新潟、NPO 法人越後妻有里山協働機構)

3. プログラム内容

○ 開 会

田園自然再生活動協議会会長の中村桂子氏より主催者代表挨拶、その後、農林水産省の青山整備部長及び環境省自然環境計画課の堀上課長からのご挨拶をいただきました。青山整備部長からは、令和元年に成立した棚田地域振興法に基づいた指定棚田地域における施策の拡充や、ポスト棚田百選としての全国 271 の「つなぐ棚田遺産」の認定など、棚田地域の活動を支援する取組についてご紹介いただきました。また、堀上自然環境計画課長は、生物多様性条約の COP15 についてふれられ、2030 年までに世界の陸と海の 30% を保全する目標達成に向けて、田園自然再生活動のエリアも今後ますます重要になっていくと強調されました。



田園自然再生活動協議会
会長 中村 桂子 氏



農林水産省農村振興局
整備部長 青山健治 氏



環境省自然環境局
自然環境計画課長 堀上勝 氏

○ 講 演

【基調講演】

「山古志のむらづくりにみる持続可能な田園自然再生活動に関する示唆」

新潟大学農学部 准教授 坂田寧代 氏



新潟大学
坂田寧代 准教授

坂田氏は長崎のご出身で、ご専門は地域環境工学、農村計画学です。新潟県中越地震を契機に新潟県に移られ、農村伝承文化を通じた地域の復興・振興に着目し、研究されています。

今回は、錦鯉の発祥地であり、日本農業遺産にも認定されている新潟県山古志村の「千人の仲間づくり」というむらづくりの事例を中心に実体験も含めご講演いただきました。

「牛の角突き」という伝統文化を守る「山古志闘牛会」の事例では、新潟県中越地震で被害を受けた「闘牛」の救出の様子や、関係住民を増やしていくために取り組んでいる「牛のオーナー制」、さらにはご自身も闘牛のオーナーになって地元の方と一緒に活動されていることなどを紹介いただきました。

中越地震の際、天然のダムのように水没してしまった木籠集落の「山古志木籠ふるさと会」の事例では、集落住民のほか外部の会員と一緒に、盆踊りや集会所でのそば打ちなどさまざまなイベント、共同水田での米づくりなど、地元の行事や伝統文化を「共に楽しむ対等な関係」で取り組んでいる姿が紹介されました。

「千人の仲間づくり」は、区長が村長に「山古志村は人口が千人減る」と言われ「それなら、千人の仲間づくりをします」と応じたことがきっかけで始まりました。坂田氏は、「千人の仲間づくり」はまずなんでも受け入れる、そして楽しいことをやっけていき、真剣に取り組むということが大事で、「地域のアイデンティティとしての伝統文化」を軸に、人のつながりをつくること、ひとりひとりが楽しく、いきいきした「場」として、そこに居場所がある、何か拠り所があることが大切だと強調されました。

伝統文化は先祖から長年積み重ねてきたもの、そして春夏秋冬めぐりゆくなかで日常のなかにあるもの、そういった伝統文化の中で、いろいろな方との出会い、そして家族との思い出が育まれていくのではないかと、これからの地域づくりに必要な貴重なヒントをいただきました。

○ パネルディスカッション

～「棚田の魅力」再発見ー持続可能な田園自然再生活動のヒントを探して～

3組のパネリストに各地域での活動を発表いただいた後、学習院女子大学の荘林副学長をコーディネーターとして、中村会長、坂田准教授、林田理事長の3名のコメンテーターと越後妻有の石塚様を加えた8名でディスカッションが行われました。

【活動発表①】『坂折棚田保全活動の現状と課題』

NPO法人恵那市坂折棚田保存会 田口 譲 氏

岐阜県恵那市の坂折棚田での活動報告。

発表の冒頭で、「自然の美しい景色を残していくこと、そこに住む人たちが次の世代にこの景色を継承していこうとすることはとても大変です」と、長年携わってきた代表としての率直な胸の内を語られました。活動発表では、石積の技術を学び引き継いでいく「石積塾」についてご紹介いただいたほか、都市農村交流や農泊の推進、「田の神様 灯祭り」などの文化伝承や広報活動など、棚田保全と地域活性化につながる取組についてお話しいただきました。また、交流施設の改修やさまざまな主体との連携のあり方、荒廃棚田の活用など地区の課題についても挙げられました。



NPO法人恵那市坂折棚田保存会
田口 譲 氏
柘植 康博 氏



【活動発表②】『NPO 法人英田上山棚田団』

NPO法人英田上山棚田団 水柿 大地 氏

岡山県美作市の上山地区での活動報告。

上山地区では地域の方と移住者が力を合わせて棚田の再生をはじめとする農林業の振興や里山の環境保全に取り組まれています。活動発表では、さまざまなイベントを企画する中、どのようなチーム体制で、どうやって地域の方の理解を得、棚田の再生や維持管理を行っているのか、英田上山棚田団の取組についてご紹介いただきました。ここでは、半農半X、移住者の多くが農業をしながら「個人の教務や得意分野、地域の資源を活かした事業」を行っており、「農」が異業種交流の場としての役割を担っているそうです。その中で、移住者は地域の根底にある仕事や活動を疎かにしないことがとても重要であると指摘されました。棚田の再生から始まった活動は、今では伝統文化の継承や、住民相互による生活支援の取組にもつながっています。



NPO法人英田上山棚田団
水柿 大地 氏



【活動発表③】『まつだい棚田バンク 多角的な棚田の活用』

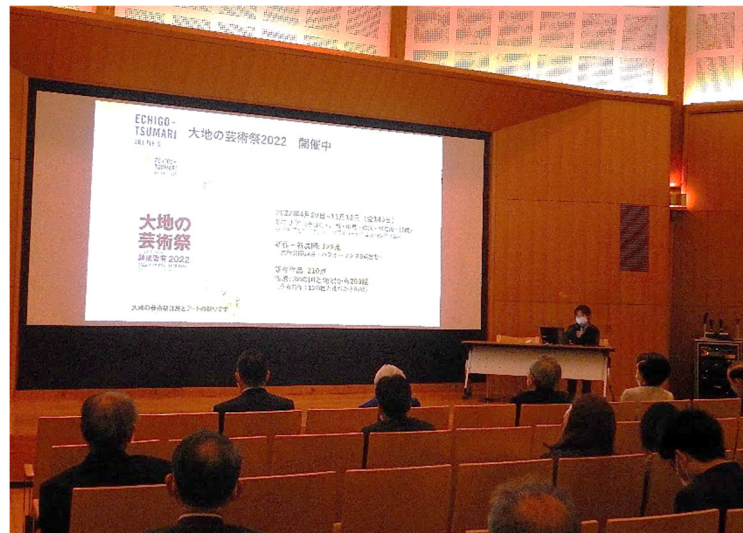
NPO法人越後妻有里山協働機構 新井 沙織 氏

新潟県十日町市と津南町の越後妻有地区での活動報告。

「大地の芸術祭」を中心に文化・芸術の力と様々な分野や地域の人々によって越後妻有地区の魅力育て、地域振興、雇用の創出、里山の保全などさまざまな活動が行われています。今回は、その中でまつだい棚田バンクの多角的な棚田活用のためのプロジェクトについてご紹介いただきました。ブランド米の生産や企業研修の場としての活用、スマート農業実証実験への参加、「FC越後妻有」という実業団女子サッカーチームを結成し、サッカー選手が農業の担い手としても活躍されている様子などお話しいただきました。また、そんな先進的な取組を進めていく中で、今後は要求される専門性、かかわる要素がさらに多様になっていくのではないかと、という課題についても述べられました。



NPO法人越後妻有里山協働機構
新井 沙織 氏



【パネルディスカッション】

学習院女子大学の荘林副学長をコーディネーターとして、中村会長、坂田准教授、林田理事長の3名のコメントーターとパネリストとして活動発表をいただいた3名に石塚様を加えた8名でディスカッションが行われました。

- ・コーディネーター：荘林幹太郎（学習院女子大学 副学長）
- ・コメントーター：中村桂子（田園自然再生活動協議会 会長）
坂田寧代（新潟大学 准教授）
林田直樹（地域環境資源センター 理事長）
- ・パネリスト：田口 譲（岐阜、NPO 法人恵那市坂折棚田保存会）
水柿大地（岡山、NPO 法人英田上山棚田団）
新井沙織（新潟、NPO 法人越後妻有里山協働機構）
石塚 康太（新潟、NPO 法人越後妻有里山協働機構）



学習院女子大学 副学長
荘林幹太郎 氏



学習院女子大学の荘林副学長の進行で、まず、3名の活動発表を受けて、多様化が進む棚田地域の取組について3名のコメントーターにコメントをいただきました。

中村氏は「これらの取組が、棚田だけでなく日本の農業の有り様、生き方の有り様を伝授して頂いたような気がする」と感想を述べられました。また、坂田准教授は「半農半X、不利地を活かして産業を興し、地域外の方の思いだけでなく、地域住民の気持ちを大事にされていることが大きな秘訣ではないか」、林田理事長は「『むらづくりの輪が人のつながりをつくる』という言葉が印象に残った」とし、「人々から美しい景色を守っていこうという気持ちが抜けていっているのではないか、というお話しが少し気になっている」と述べられました。荘林副学長は「地球環境問題解決のある種の形として、棚田の景色をシンプルに見て美しいと感じることこそが重要なのではないか。半Xのクラスター（集まり）をつくるために、半農の共同活動が重要な役割を果たしているということ、さらに棚田の保全が最重要となりがちであるが、棚田の保全と並ぶ、あるいは支える別の目的がある、という別の観点があるということが新しい」とコメントされました。

○棚田の価値と活用方法

コメントに対して、水柿氏は「今、求められている棚田の価値を考えると、人のつながり、協力し合う体制があり、共有財産としていくことが重要ではないか。棚田は、人の手がどうしても必要なもので、それ故つながりを作る場所となる。お米以外にも社会人の余暇を過ごす場所や、学生と企業を育ててつないでいく場、広告料といった形で収入になり、時代に合った棚田の活用が必要なの

ではないか」と述べました。

田口氏は「棚田を所有している方が、棚田の多様な機能についてもっと理解を深め、真剣に棚田を残さなければならないという気持ちになる必要があると思う。昔は、お米が中心で貨幣価値があり、自分たちの生活の糧となり、年貢として納めなければならなかった立場から、当時の営農者は真剣にやっていた。今はそういかなことが現状であるが、次の世代になんとか築いてつなげていきたい」と思いを語られました。

新井氏は「改めて棚田を保全するというよりは、どれだけいろいろな価値を付与していけるかが重要。棚田には歴史的な価値があり、お米の食品価値や、生物多様性もあるが、そこに体験や地域外の方の居場所など、どれだけ付加価値を見出していけるかが重要。大地の芸術祭も付加価値の一つとして農村に足を運ぶきっかけの一つとなっており、農業部門でももっと面白い農業、カッコいい農業と思ってもらえるような取組を考えていきたい」とコメントしました。

石塚氏は「棚田には住人の方々のストーリーや感動があり、私自身もっと仲間を増やして活動していきたいと感じている。最も深刻な問題は担い手がないことなので、我々がモデルとなって少しでも農業や棚田に興味を持ってもらえるような取組をしていきたい。」と述べられました。

○地域の人の思いと付き合い方

中村会長からの「ももとの地元の方々の反応はどうでしたか」という問いかけに、

水柿氏は「当時の地元の人には「邪魔しないのが最大の応援だ」と言われていたが、最近では、地域の方も整備を行うようになり、地域の方の活動に移住者が駆り出されるようなことが増え始めた。ただ、そういった変化がみられるようになったのは、活動を始めて10年近く経った頃からだ。地域の方と企業の活動のスピードには差異があり、地域の方々の都合で動くスピード、外の移住者の方々との連携で進むスピードなど時間軸はいくつか持った方がよいと思う。企業の都合で地域の方を引っ張るのではなく、ゆっくり歩むことも重要。また、言語も地域の方々と話す言葉、外で話す言葉で、かみ砕いて地域の方と話すような使い分けをした方がよいようだ」と指摘されました。また、「水路掃除や草刈りなど、地域の仕事を疎かにしないことが大切で、水路掃除のイベントなどは地域に愛着を持ってもらう一役を担っている」そうです。

新井氏は「地域に入るときはまず掃除から行うことは賛成だ。我々の場合は地域貢献の支えとしてではなく、地域に入れてもらう活動として、河川やドブ掃除を行っている。棚田の価値として新しく作ったもの、有識者が持ち込んだものではなく、その地域に元々存在したものから良いものを見つけ出し、それを提供したいと思っている。高齢で引退される方々には棚田に対する豊かな思いがあり、それを受け継ぐことができるのかといった心配はある。思いは、なかなか入り辛いところがあり、ただただ仕事として、商売としてとらえていないか確かめながら取り組んでいく必要がある」と述べられました。

石塚氏は「地域外の方々も参加するイベントの際に、我々が間に入って、地域の方々との活動の敷居を低くするなど、外の方が地域の活動に参加しやすくすることが大事。清掃等のイベントに参加し、緊急時でも支えあえる関係性を築いていきたい」としました。

林田理事長は「水路掃除が地域外の方々のイベントとして人気があることに驚いた。地域の方にとって水路の管理は大変な負担であり、楽しみというよりは義務や責任が付きまとう。若い方々が興味を持つポイントなど、今回のお話しはとても重要な情報であり、これからの活動のヒントになりうるのではないかとコメントした。

○棚田を美しいと思う気持ちを次の世代へ

田口氏は「棚田はたくさんの役割を持っていて、良いところもたくさんある。そういったところに地元の方がもっと気付かなくてはならない。地元の良いところを次世代に伝えることが重要であり、これからも小学生への体験学習や中学生への地元調査学習を通して学んでもらう取組を続けていきたい。やはり人は美しいと思う自然を感じて仕事を続けられると思う」と語られました。

水柿氏は「以前は閉鎖的な環境で当たり前に行ってきたこと、外部の人が見ることができなかったものが、今は共有できるツールがあり、評価機能もあるため、再認識できることで美しさの感覚は今後も続いていくと思う。外部の人しか気づくことができない美しさもあり、そういったところを外の方で色々なツールを活用して繋いでいくことができるのではないかと。今後、見ているだけで

終わってしまう世代、繋がりを求めて実際に来てくれる世代と二極化すると思うが、後者が少しでも出てきてほしいと思う。実際に活動する人の質を上げていくことで、外部から支援してくれる人とうまくつながり、都市と農村がつながるきっかけにもなると思う」とコメントしました。

坂田准教授は「今回の集いのように、色々な知恵を貯め発信できる場が重要であり、それぞれが情報を持ち帰ることで地域の活性化に役立てることができる。あまり共有されていない工夫や新しい知識を蓄えていくことが大切」とし、荘林副学長は「地域によって異なると思うが、棚田の価値をどこに見出すかによって、外部の人をどう巻き込んでいくか、あるいは棚田をどう守っていくかが違って来る」とコメントしました。

最後に、中村会長から「棚田は、今まで見たことがない都会の人でも感動を覚えるものが日本人としてある。この感覚が、若い人たちに残るのか、棚田の美しさをみんなが認めるかどうかで今後の棚田の有り様が決まるような気がする。まだ、そのような気持ちがある方々は、今日来て頂いた皆様のように、新しい道を作ってくださいと思う」と、これからの展開に期待を込めたコメントをいただきました。



中村桂子 氏



坂田寧代 氏



林田直樹 氏



水柿大地 氏



田口讓 氏



新井沙織 氏



石塚康太 氏

○ 閉会

最後に林田理事長が、今回の田園自然再生活動の集いに参加いただいた皆様と出演いただいた皆様に、3年ぶりに対面開催できたことへの感謝を申し上げるとともに、生物多様性の重要性についてわかりやすく書かれた2001年ノーベル生理学・医学賞を受賞したポール・ナースの「生命とは何か？」の一部を紹介して、閉会の挨拶としました。

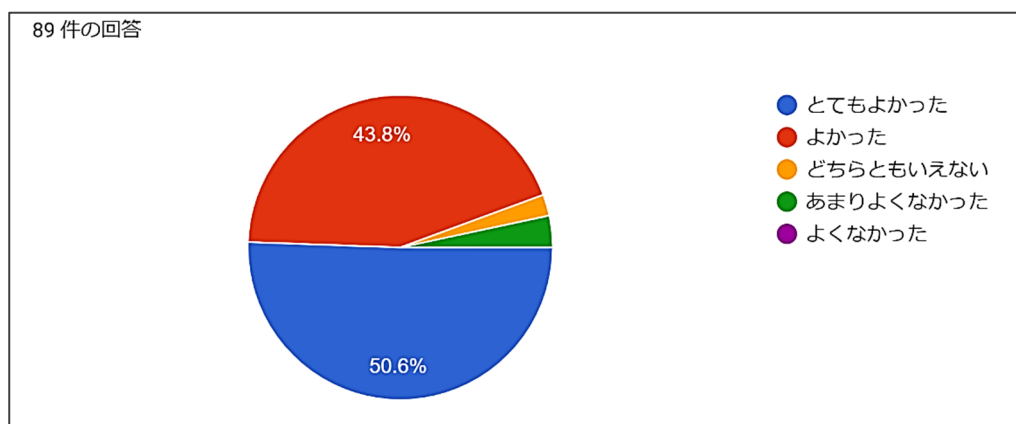


(一社) 地域環境資源センター
理事長 林田直樹

4. 参加者アンケート

今回、オンラインイベント終了後、Googleフォーム（イベントサイト埋め込み式）で作成した参加者アンケートを実施したところ、89件の回答を得ました。

Q. 本年度のシンポジウム「田園自然再生活動の集い」はいかがでしたか？



その他記述式回答

- ・今回のシンポジウムで印象に残ったこと、参考になったこと（69件の回答）
- ・今後のシンポジウムで取り上げて欲しいテーマ（53件の回答）
- ・その他ご意見など（40件の回答）